

第3回

ぐらすの住まい

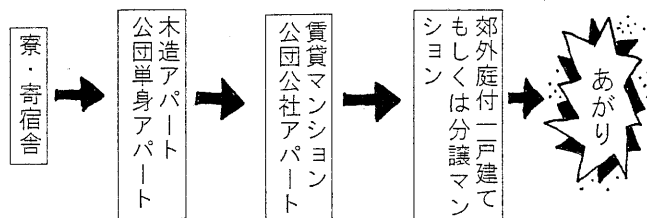


「こもれび滝山」コミュニティ室にて

第3回のコーポラティブ住宅見学・学習会は3月9日、明治大学の園田眞理子先生のご指導のもと、30名の参加者を得て行われた。場所は、東久留米市の「こもれび滝山」で、東京都の認定を受けた「高齢者向け優良賃貸住宅」である。

老いの住まいの現状と高齢者の選択

園田先生のご指摘によれば、今の高齢者の多くは戦後高成長期に各々のライフステージの変遷につれ、次のような住みかえを行ってきた。



この「あがり」で文字通りおしまいにしようと思っていたところ、長寿化が進み、あと20年も寿命があるという。しかも、老友の我が家は築すでに20年以上たち、相当のダメージを負っている。リフォームしてバリアフリー化し、住み続けるべきか、それとも長男夫婦を呼びもどして二世帯住宅に建てかえるべきか、迷うところである。

とりあえず在宅介護や宅老所をつなぎ、いざという時は最近増えてきた介護専用型有料老人ホームに入ればよいと考えている人も多いと思われる。財力のある高齢者はそれでもよいが、ない人はどうすればよいのか。政府や自治体の方でも、つとに高齢者住宅について検討しており、特養の他に、シルバーハウジングやケアハウス、高齢者向け優良賃貸住宅などの施策・対策を講じている。これらはいわば住宅困窮者や生活困窮者向けの救済策のおもむきがあり、公開抽選や所得制限等のしぼりがあり、財政難の折柄、数にも限りがある。

我々多くの中間層はどのようにして老いの住まいを求めていけばよいのか。ぐらす・かわさきが推し進めようとしているコーポラティブハウスは、高齢者のみを対象としている訳ではないが、そこに住む人々が共

にくらし、支え合うコミュニティづくりの場を提供することを目指して検討を進めている。

「こもれび滝山」の特徴

施設見学に際しては、シニアライフ研究所の高沼薫氏（こもれび滝山の企画推進者）から説明を受け、入居者の許可を得て、部屋の中も見学させてもらった。3階建22戸、自立した高齢者ばかり29名が住む“マンション”だが、以下のような特徴をもっている。

まず第1は、東京都高齢者向け優良賃貸住宅供給助成事業制度のモデル事業認定を受け、いろいろの行政支援を享受していることである。建築費の補助、家賃対策補助等が主なもので、それらにより入居者の負担する家賃は1DK～2DKで7～12万円と有料老人ホーム等と比べて、かなり割安になっている（「こもれび滝山」は中堅所得層未満の人を対象とする）。

第2は、高齢者の生活特性や身体特性に配慮した、安全なシルバー仕様が随所に見られたことである。部屋などのバリアフリー化はもちろん、床暖房、高齢者対応ユニットバス、センサー付きコンロ等がある。また、生活支援施設も整っている。玄関入ってすぐのところ、コミュニティ室（53㎡）、サークル活動室（和室19㎡）、生活健康相談室などがあり、入居者同士、ときには地域の人々との交流の場として活用されている。

第3は、サービス面の特徴で、地域の資源を活用した種々の工夫がなされている。まず昼間はNPO「いちごの会」から交代で1～2名の管理人が常駐し、身の回りのことを手伝い、在宅介護サービスなどの取り次ぎもする。夜間緊急時の通報は、室内の緊急ボタンから提携する地元のタクシー会社につながり、タクシー運転手が、現場にかけつけるシステムになっている。我々がお訪ねしたお姉妹の部屋でも、テーブルの上に緊急ボタンが置かれていて「これがあるからいつも安心！」と言っておられた。水道センサー（在宅時24時間水を使用しなかった場合、自動通報される）による安否確認もタクシー会社に委託している。

（麻生区／山村茂）